荻原雲来博士の書翰

［一］

拝復　余寒尚果酷しき折四大軽利御法益の段大賀至極に候

河口の namo 'mitâyus Buddhâya は意義を作さず[1]、但し namo 'mitāyur-buddhāya に作れば可なり是は無量寿者と覚者の二語を合成して一語として取扱へるものに候　貴殿の提示せる如き二種の唱へ方は固より最も普通のものにして正常なること論無し　通常は貴示の如き形を用ゆ

河口の用ひし如き形は上の如く訂正すれば文法上何等不満の点あるに非れども　普通の用例に見出し申さず候　以上取急ぎ御回答まで　匆々

三月八日　　笹本戒浄様　　荻原　雲来

＊封緘はがき　表・横浜市神奈川町慶運寺　笹本戒浄様　消印日付・昭和二年三月九日

裏・東京府北多摩郡多摩村誓願寺　荻原雲来

（慶運寺蔵）

（1）河口慧海著「在家仏教」（大正十五年八月、世界文庫刊行会刊）五六頁、および全集中巻八九頁参照。

［二］

拝啓　何時も御清昌奉大賀候　先日は折角御光来被下候に生憎不在御面晤を得ず遺憾の至に候　其節は甜味沢山御恵贈被下御芳情の段多謝致候

次に御尋の「往生」の梵語は pratyājāyate（三人称単数、現在、直説法）と申し、jan（生る）と言ふ語根（root）に字縁の ā を加へ ā-jan にて 又た単に「生る」と言ふ義に用ゐらる、ā は「近く」「方に」の義ある接頭辞に候、此に更に prati（対して、復たび等）てふ接頭辞を加へ prati-ā-jan が連声法の規定に由り pratyājan となり「復たび生る」「生れかはる」と言ふ義となる 此の pratyājan の三人称、単数、現在、直説法が即ち pratyājāyate なり、されば此の語は正しくは「転生」とか「再生」とか訳するが至当に候、併し先賢が往生と訳したる意を考ふるに「往」は移転の義に非ずして状態の転変を言ふものと見るべきが如し、即ち現在の生の状態が転変して他の生の状態となるを以て此を往生と解すべきが如し 極楽国土を立つる経文にありては pratyājāyate が往生と訳されて此が彼の国に往きて生ると言ふ義に取らるゝも不当に非れども極楽国土其他地方国土を立てざる経文にありても此の語あり 例せば 波利にては此を paccājāyati に作り波利の中阿含や相応阿含中に散見せり 此等の典拠より見れば往生は彼の国に往きて生るの義に非して 単に現生を捨てゝ来生を受くと言ふ義と解すべし 以上取急ぎ御返事まで 匆々

十二月十二日　　笹本戒浄上人　侍史　　荻原　雲来

＊封筒欠逸　「荻原雲来文集」九一八頁所収。　　（慶運寺蔵）

[三]

拝復　不相変御化益弥よ御隆盛の御様子何より慶賀の至りです、却説過日御手紙御回答大に延引しまして申訳ありません、御答左に jāyate 又は ājāyate は単に「生る」と言ふ義、此に prati を冠すると pratyājāyate にして、「或るものと生る、或る処に生る、更に生る」等と言ふ義で、何時ぞや申し上た通りでございます、決して単に「生る」と言ふ義ではありません、次に往生と訳せられたる語が此の外にも有りましょうが小生は一寸見出しません、若し其の原語が判りましたら御報知を願ます、

又波利文の「梵を体とし」は正しからず、正しくは、「梵なり」又は「梵の如し」と訳すべきです、覚音の注釈を見ますと、「仏を最勝の義の故に梵とす、又は梵に等しきが故に梵の如しとす」とあります、仏を梵と言ふは威力等が梵の如くなれば梵を借りて仏徳を彰すまでです、故に或る処には仏は梵の徳と相応するが故に仏を梵と言ふこともあります、仏の体が梵の体と同じと言ふのではありません、但だ梵の功徳を取るまでです、故に「生主、大我」などを認めて居るのではありません、但し地方の涅槃経などに至りて大我を説くは教理の発達上印度哲学の所謂ゆる外道の我（アートマン）や梵と同じ物を仏性と認むるに至ったのです、

以上語義の説理に兼ねて私見迄乱筆御容赦を乞ふ　匆々

四月二十七日　　笹本戒浄様　　荻原　雲来

＊封筒欠逸　「荻原雲来文集」九一八頁所収。　（慶運寺蔵）

［四］

拝啓　姉崎君の訳[1]の　眼を体とし云云の四語は元と　cakkhubhūto　ñāṇabhūto　dhammabhūto　bra=hma-bhūto　です、　bhūto　は合成語の尾にありては「猶ほ…の如し」又は「…より成立つ」の義です、「…を体とす」と訳せるは此の後義です、今の原文は寧ろ初義に取るが至当と考へます、又姉崎君の「即ち如来なり」は厳密に言へば「即ち」の語は原本にありません　唯だ「如来なり」と言ふべきです、而して前の　cakk-hubhūto　等の四語は　此語の因故には非ず　此等の四語及び其他の語乃至如来なり　は何れも世尊の徳相を種々の名目を以て顕示したるに過ぎず、次に　pratyājayate　を「或る処に生る」と書きましたのは　此の語は転生を意味することを知らさむが為です　厳密に言へば但だ生るに非して（何物に）生る、（何処に）生る等の義を顕はす時に用いるものですから斯く申したのです　故に精密に言ふならば「（或る処に）生る」と括弧を加ふべきです、さりとて一物が或る処に移動して其処に生ると言ふ義ではありません　往生の往も同義です

以上　取急ぎ要点のみ略答致しました、乱筆御容赦を願ふ　匆々

五月七日　　笹本戒浄様　　荻原　雲来

＊封緘はがき　表・横浜市神奈川区飯田町慶運寺　笹本戒浄様　消印日付・昭和九年五月八日

裏・東京府北多摩郡多摩村誓願寺　荻原雲来

（慶運寺蔵）

（1）姉崎正治著「根本仏教」（明治四十三年、東京博文館刊）八六頁参照。

［五］

拝復　拙僧去る十一日より山口県へ旅行して居り　一昨日帰寺しました

さて御尋の「世尊は眼の如く」とは導く義より名づけ、「智の如く」とは所作を知る義より名づけ、「法の如く」とは無倒の自性より名づけたものです、次に梵身又は梵成の梵は梵天其ものではありません、梵天は印度人の考では最尊最上ですから　其の最尊最上の義を取て梵の字を用いたのです　換言すれば最上身、最上成と言ふ義です、次に「自作自受」の自は梵に　sva　と言い　無我の我は梵に　ātman　と言います、前者は英語の　own　です、後者は英語の　soul, self　です、

以上にて御了解の事と存じます　四大軽利　御化益の弥よ盛ならんことを希願致します　匆々

六月二十二日　　笹本戒浄様　　荻原　雲来

二伸　右文中梵成、最上成の「成」の字は穏当でありません　御手紙に「成」の字でありましたから「梵成」としましたが　実は　ब्रह्मभूत　は「猶ほ梵の如し」又は「梵なり」と訳すべきです、木村君の梵成は此の第二の意味でしょう　然らば「梵である」と言ふ義ですから　漢語なら単に「梵」とのみ言に当ります、

＊封緘はがき　表・横浜市神奈川区飯田町慶運寺　笹本戒浄様　消印日付・昭和九年六月二十二日

裏・東京府北多摩郡多摩村誓願寺　荻原雲来

（慶運寺蔵）

原文により姉崎氏の訳は不完全と存じます

anityā	bata	saṃskārā	utpādavyayadharmiṇaḥ
無常なり	(感嘆詞、無訳)	諸行は	生　滅　法なり

utpadya (1)	hi	nirudhyante	teṣām (2)	vyupaśamaḥ (3)	sukham
(諸行は)生じて	(実に)	滅す	彼 彼の	止むことは	楽なり

(1) utpadのgerund (生)

(副詞) 接続詞ならず故に(又)の意なし。

(2) 彼らの 即ち生じて滅すること 復数に御注意 pulralのgenitiveなり

(3) nirudhaは生に対する滅 vyupaśamaは"止むこと" 寂滅と言ふも生滅の滅の意と異る

[六]　二折りのカード（縦 9.0／横 28.6 cm）にインクで書かれたもの。年代等は不明である。